

歴史公園と山岳地の花風景(大分県)

奈良県立大学 名誉教授
西田 正憲

1. 大分県と花風景

大分県は、北は瀬戸内海の周防灘、東は豊後水道に面し、歴史的に瀬戸内海地方との関係が深い。北部・中部は東から西に国東半島、高崎山、鶴見岳、由布岳と火山が連なり、さらに九重山(くじゅう連山)には久住山、大船山などの多くの火山を擁する。別府、由布院など温泉地も多い。山々の間の平地も火山性の台地で、断層や河川の浸食によって、日田、玖珠、安心院などの盆地や耶馬溪、院内などの溪谷をつくり、各地に特色を生みだしている。南部は奥深い九州山地をなしている。県全体としては山地が多く平野に乏しいが、その分豊かな自然を育んでいるといえ、火山、山岳、海岸などの国立・国定公園が多い。

中世には守護大名の大友氏が海外貿易や文化振興によって府内(現大分市)に繁栄をもたらした。近世以降、豊臣・徳川政権は大友氏のような大勢力出現を恐れて、中津、日出、臼杵、竹田、森などの8藩の小藩や日田の天領などに分立させたが、その結果、文化面でも産業面でも各地に個性をもたらした。1980年代に全国に先駆けてはじまった地域振興策の一村一品運動も大分県の風土を反映しているといえよう。

県花はバラ科サクラ属のブンゴウメ(豊後梅)である。古い国名にちなんでいる。一説にはウメとアズメの雑種だと推測されている。ウメは古代中国から九州にもたらせられ、豊後梅や肥後梅と呼ばれて、全国に広まった。観賞用の花ウメと食用の実ウメがある。大分県のブンゴウメは白花の白梅が主だといわれる。

花風景は、果実栽培や梅花観賞の梅林、城郭跡のサクラ、高原の観光の花公園、山岳地のミヤマキリシマや湿原植物などが特徴的である。

2. 別府公園のウメ

別府公園はウメの名所であるが、別府の歴史を偲ばせる都市公園でもあり、日本の歴史公園 100 選に選ばれている。別府市の中心部に位置する面積 27ha の広大な公園である。マツの高木が生育し、芝生広場ののびやかに広がるなかに、ブンゴウメを含む白梅、紅梅などのウメの中低木が独特の樹形をみせている。サクラの名所でもあり、ウメが咲き誇ったあとにソメイヨシノが春爛漫と咲き乱れる。公園の西方には秀麗な火山の鶴見岳が望める。緑地に隣接して建築家磯崎新設計の会議場、コンサートホールなどからなるビーコンプラザが建ち、高さ 125m のグローバルタワーからは市街と別府湾を一望できる。

花風景の背後に潜む別府公園の歴史は時代を映しだす鏡のようでもあり、少し詳しくふれてみたい。

公園の立派なマツは、1906(明治 39)年、梨本宮守正親王の御賜金により、野口原一帯に 35000 本のマツの苗を植樹した名残だといわれている。植栽木の一部が現在の公園に残り、立派な大木となっているのである。1907(明治 40)年、のちに大正天皇となる当時の皇太子が別府を行啓する。大韓帝国、長崎、鹿児島、宮崎を訪問して、高知へと向かう途次にあった。皇太子行啓のために休憩所が建設され、1万数千坪と伝えられる別府公園が整備される。別府公園の誕生である。大正時代には日露戦争の功績を称える旅順港閉塞船報国丸のマスト、東郷平八郎揮毫の忠魂碑が設置された。

別府温泉は江戸時代から知られた温泉ではあったが、大正時代に全国レベルの一大温泉都市となる。明治時代に別府港が建設され、大正時代になって大阪商船が大阪と別府を結ぶ瀬戸内海観光航路を売

りだして一大観光地となった。1927(昭和 2)年の東京日日新聞・大阪毎日新聞主催の「日本八景」選びでは温泉の部で1位になった。日本八景は葉書による投票方式により、旧来の名所ではない新しい風景地の日本一を選ぶものであり、このとき1位には山岳の部で雲仙、溪谷の部で上高地、瀑布の部で華嚴の滝、湖沼の部で十和田湖などが選ばれた。これらはやがて生まれる国立公園の核心部となっていく。

この時期に活躍するのが別府観光の父といわれる油屋熊八(1863－1935)であり、別府公園には彼の碑が建ち、プレート of 解説板で功績が顕彰されている。油屋熊八は 1911(明治 44)年別府の亀の井旅館(現亀の井ホテル)を創設し、日本八景の選定においても葉書の組織票を増やす努力をする。特筆すべきは、大正時代末から「山は富士、海は瀬戸内、湯は別府」というキャッチフレーズを全国行脚で広めたことである。富士山に比肩する瀬戸内海、富士山と同格の瀬戸内海という発想をわかりやすい言葉で説いたのである。彼は別府のみならず瀬戸内海の観光宣伝もしたといえる。1910(明治 43)年の伊藤銀月の著書『日本風景新論』も富士山と瀬戸内海を「日本の双美」だと称えていたが、「日本の双美」は流布しなかった。

1928(昭和 3)年、別府公園で別府市主催の中外産業博覧会が開催される。中外とは国内外といった意味であり、本館、温泉館、風景館、美術館のほかには北海道館、満蒙館、朝鮮館、台湾館、南洋館などが設置された。この博覧会に合わせて、油屋熊八は亀の井自動車(現亀の井バス)を設立、日本初の女性バスガイドによる地獄めぐりの定期観光バスの運行を開始する。別府公園は 1937(昭和 12)年の国際温泉観光大博覧会の会場にもなった。国際温泉観光大博覧会には、温泉館、観光館、産業本館、陸軍館、海軍館、電気科学館、大分県館などの展示館が設置された。博覧会と観光バスは別府を大きく飛躍させた。

第二次世界大戦後は米軍が野口原の土地 43ha を接收、進駐軍駐屯地とする。1946(昭和 21)年から 1956(昭和 31)年まで駐屯し、キャンプ・チッカマウガと呼んでいた。チッカマウガとは最初に駐屯した陸軍歩兵第 19 連隊の愛称であり、元々は南北戦争の激戦地となったアラバマ州の地名に由来している。この激戦地は現在チッカマウガ国立戦跡公園になっている。当時、米兵が駐屯地にヒノキを植え、「チッカマウガツリー」と呼んでいたが、現在も公園に大木として残っている。米軍が去ったあと、1957(昭和 32)年から陸上自衛隊が駐屯するが、駐屯地は 1976(昭和 51)年に別府市に返還される。返還地は 1977(昭和 52)年に昭和天皇御在位 50 年記念公園の指定を受け、再び別府公園として整備される。昭和天皇の在位 50 周年記念事業の一環として地方公共団体の都市公園 11 カ所が指定されたが、その一つだった。

3. 岡城跡のサクラ

瀧廉太郎の名曲『荒城の月』で知られている竹田市の岡城跡にはソメイヨシノを中心にヤマザクラ、ボタンザクラなどが咲き誇る。岡城は国の史跡であり、サクラは日本さくら名所 100 選に選ばれている。岡城跡の急勾配の道を登ると、石垣に囲まれた平らな城跡に出て、阿蘇山などの遠方の山並みを眺められる。石垣はほぼ垂直に近く、美しい曲線を描いている。サクラは、城郭や河岸などに映えるが、『荒城の月』の哀愁に満ちた旋律や「むかしの光いまいずこ」の歌詞の一節のせいもあるのか、どこか寂寥とした感のあるこの城跡によく映えている。この城跡は時の流れや無常を強く感じさせる。瀧廉太郎は少年時代にこの荒廃した岡城跡に登ってよく遊び、そのイメージが 1901(明治 34)年の『荒城の月』の作曲に投影されていると伝えられている。作詞は著名な詩人であり英文学者の土井晩翠(作詞当時の姓は「つちい」、後に改称)である。岡城二の丸跡には瀧廉太郎の銅像がある。岡城は南北朝時代以来の中世山城としての起源をもつが、現存する城跡は、1594(文禄 3)年に播磨国三木城(現兵庫県)から移った岡藩初代藩主中川秀成により約3年間を費やして拡張整備された。稲葉川と大野川に三方を囲まれた丘陵地の尾根筋にある天然の要害であり、難攻不落の城といわれた。1871(明治 4)年の廃藩置県によって、廃城になり、建造物は取り壊され、石垣のみが往時を偲ばせることとなった。

4. 九重山のミヤマキリシマ

九重山は九州本土最高峰の中岳(1,791m)をはじめとして、久住山、稲星山、星生山、三俣山の溶岩円頂丘や、大船山、平治岳の成層火山などの1,700m級の山々の総称で、くじゅう連山ともいわれる。九重山の大半は瀬戸内海の沿岸域つまり瀬戸内海環境保全特別措置法の対象区域に入っている。旧久住町(現竹田市)と九重町との行政界がほぼ分水嶺にあたり、九重山の大半を擁する旧久住町は瀬戸内海の集水域となっている。この九重山一帯にはミヤマキリシマが群生し、春には見事に咲き誇る。一帯は阿蘇くじゅう国立公園に指定され、大船山のミヤマキリシマ群落が天然記念物に指定されている。

ミヤマキリシマは、ツツジの一種で、春に山が緑で覆われる頃、樹高1mくらいの樹冠にいつせいに桃色、紫色、赤紫色の花をつけて群生する。九州の火山地帯の高地に自生する花風景であり、雲仙岳、阿蘇山、霧島連山にも見られるが、九重山のミヤマキリシマの大群落は圧巻の風景である。

九重山の西麓に、阿蘇山から瀬ノ本高原を越えて湯布院・別府へ抜けるやまなみハイウェイ(大分県道11号線)が走り、この道路沿いからもミヤマキリシマを見ることができることから、シーズンには混み合う。九重山は、利用拠点の長者原などから比較的容易に登れることから、また、山麓には筋湯温泉や坊ガツル湿原などの魅力も多いことから、登山者は多い。



写真 九重山のミヤマキリシマ 眼下は坊ガツル

5. 坊ガツル・タデ原の湿原植物

九重山(くじゅう連山)の中心部には山に囲まれた盆地があり、標高約1,200mの坊ガツル湿原がある。また九重山の北側に火砕流台地の飯田高原が広がり、その長者原には標高約1,000mのタデ原湿原がある。坊ガツル湿原は竹田市に、タデ原湿原は九重町に位置する。これらは2005(平成17)年にラムサール条約の湿地に登録された。山岳地域の国内最大級の間湿原で、色とりどりの可憐な花が咲き乱れる湿原植物の宝庫である。間湿原とは、主に低地に位置する低層湿原、主に高地に位置する高層湿原の間を占める湿原であり、高地に行くほど水中に堆積した泥炭層が厚く、地下水の影響が少なくなって、富栄養から貧栄養へ向かう。

二つの湿原は共に火山群の湧水地に誕生したもので、坊ガツル湿原は三俣山、大船山、平治岳などの火山群に囲まれた盆地に、タデ原湿原は三俣山の火山地形の扇状地にできた湿原である。黄色い花のキスミレ、ミツバツチグリ、サワオグルマ、ユウスゲ、桃色や紫色の花のイワカガミ、ノアザミ、ノハナショウブ、サワギキョウ、ヤマラッキョウ、マツムシソウなど多彩である。紫色の花のツクシフウロ、白い花のシムラニンジン、黄色い花のコウライモエソウ、クサレダマなどは絶滅危惧種であり、貴重な湿原植物も多い。

よく知られている山男の歌「坊がつつる讃歌」は、1978(昭和53)年のNHK「みんなのうた」を通じて広く普及したが、九重山の四季を讃美する歌である。坊ガツルやタデ原は変わった地名である。「坊」は当地の山岳信仰の法華院を指し、「ツル」は水流のある平坦地で湿原を指している。長者原は古代この飯田高原の地で栄え、栄枯盛衰の伝説をもつ「朝日長者」にちなみ、タデ原はその長者が好んで食べたタデの一種ヤナギタデの植物が繁茂していたことに由来していると伝えられている。

参考文献

1) 西田正憲・佐山浩・水谷知生他『47 都道府県・花風景百科』丸善出版、2019